

平成22年度第1回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから7ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

マドリッドに滞在中に齒磨きのチューブが空になった。

フロントで聞くと、ずうっと先のフアーマシアまで買いに行けと言う。「コンビニエンス・ストアはないの」と聞いたが、かなりの繁華街なのにそういうものはないと言う。日本だったらどんな町角にもあるのに。

フアーマシアまでは五百メートル以上あった。調剤室を持った大きなドラッグストアなのでヨーロッパ各国製の齒磨きがおいてある。ついでに胃腸薬も買つてホテルに戻った。

途中に、大きなハム屋があった。ハムの専門店では他の精肉などはおいていない。巨大な豚の脚の生ハムが何十本も天井からぶらさがっている。生ハムといっても二十種類以上もあるらしい。ガラスのショーケースの中には、これまた何十種類というソーセージやプレスハムが、色とりどりに並んでいた。

朝というのに店には大勢の主婦が買いに来ていた。このハムを百グラム、あのソーセージを二本などと店員とやりとりしていた。

日本だったらさしずめスーパーマーケットかデパートの食品売り場に行くところだろう。もってとりばやくコンビニまで行けば、真空パックのハムもフランクフルトソーセージも売っている。だが、ここにはコンビニはない。齒磨きのペーストもソーセージも、専門店に行かなければならない。不便といえば不便である。

コンビニの店は、ヨーロッパではあまり見かけない。イタリアでもドイツでもオランダでもほとんどなかった。コンビニの発祥地アメリカでも、日本ほど何れも売っているようなコンビニはないだろう。

どんな国にも、何でも手に入るような巨大なスーパーマーケットはある。大きな手押し車で、山のように商品を買っているおばさんたちはどの国でも見かける。それは一週間分の食糧を計画的に買うためだ。一方町には、小さなグロサリーストアがいくつもあつて、とっさに必要な生鮮野菜や煙草、清涼飲料水ぐらいはそこで買える。しかし何でも調う日本式のコンビニはない。

その代わり専門の肉屋やハム屋がある。そこに行けばどんな種類の肉でもフレッシュなのが手に入る。いわゆるデリカテッセンの店では、あらゆる種類のチーズや珍味の瓶詰、気のきいた缶詰などが所せましと置いてある。八百屋には色々な新鮮な野菜が、裸のまま水を打っただけで山のように積み上げられている。何もかもパックされている日本のコンビニとは大違いだ。主婦は手にとって吟味し、欲しいだけ自分で袋につめてレジに持って行く。面倒といえば面倒だが、買い物の楽しさがある。

コンビニエンス・ストアがない代わりに、すばらしいインコンビニエンス・ストアが輻を連ねていると思えばいい。主婦は、新鮮で本当に美味しい物を買うためには、不便をしのいで何百メートルも歩いて専門の店まで行く。

日本だつて三十年くらい前までは、そうしていたはずだ。ところが最近では、どの町角にもコンビニができて、そこで間に合わせてしまう。私の家の近くだけでも六店ある。コンビニにちよつと毛の生えた程度のスーパーも随所にある。主婦は遠くの専門店に行くのをやめて、ちよつとしたものは近くのコンビニですませるようになった。第一、高級な専門店など姿を消してしまったではないか。高級な生ハムが何種類もおいてあるような店は東京のどこにもない。有名なデパートの売り場だつて、スペインの町角の小さなハム屋とはビカクにならない。

【スペインのハムのすごさはA筆舌につくせない。チェルド・イベリコという最高級の生ハムは、豚に生れてからナツツと栗の実しか食べさせずに育てるところから始まる。その脚を骨付きのハムにしたてて、長期間熟成させる。刈切りにしたのを食べると、肉にナツツの香りがする。世界に例のないこの美味は、スペインでも専門のハム屋に行かなくては買えない。イタリアのパルマ産の生ハムの、類焼(不健全)といつていいほどのかぐわしさ。ドイツのシュワルトワルト生ハムの地底から生まれ出たような精気。スコットランドの生ハムの色の朝の光のような鮮やかさ。】コンビニやスーパーで買う、パックに入った紙のように味気ないハムとは大違いだ。コンビニができて、日本人は本当に豊かなものを失つたのだ。

日本のコンビニには、ハムやチーズからちよつとした野菜までおいてあるし、パンも弁当もそこそのものが手に入る。文房具も日用品も、雑誌やビデオ、アルコール飲料に至るまで買える。本当に便利で、つい立ち寄ってしまうのはよくわかる。

しかしこの便利さと引き換えに、生活の中にあつた豊かで価値のあるものを失ってきたこともたしかだと思う。コンビニで買った食材で育った子供たちは、食べることの文化を知らずに大人になってしまふ。食欲と栄養だけの食生活、そしてその裏返しとして現れた低俗なグルメブーム。食文化というのは、長い時間をかけて生活者たちが作り上げた遺産であることを忘れてしまったのだ。

食物だけではない。文房具も衣料品も日用品も、どのストアで買っても同じものだと思えば人間の生き方そのもので平均化されてしまふ。

コンビニが字句通り便利で、近代生活に **B** なものになったことを否定するわけではない。それを絶対に必要としている人たちがいることも確かだ。必要があつたからこそ今日の隆盛があるのだ。

しかし、日本でだけこれほどまでに普及し、専門店というインコンビニエンス・ストアを完全に駆逐してしまった罪の方も忘れてはいけない。コンビニの普及は、明らかに **4** 文化の破壊につながつたのだ。

二十一世紀は、それぞれに個別的な文化や伝統を持った国家が、お互いに自己主張しながらインコンビニエンスに耐えて共存する時代になるだろう。コンビニエンスを優先させたために個別的な文化を失つた日本人が、本当に国際社会で生きてゆけるのか。大げさかも知れないが、私は不安に思つた。

(多田富雄「インコンビニエンス・ストア」より)

問1 線aの漢字の読みをひらがなで書き、線b・cのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線1について、筆者はこうした店員との一見わずらわしい「やりとり」に何を感じましたか。文中より最もふさわしい七字のことばを探し、書き抜きなさい。

問3 線2「何もかも売っている」とありますが、日本の「コンビニ」にはそれ以外にどのような特徴がありますか。線2より後の文中から三つ、それぞれ十二字以上十五字以内のことばを探し、その最初の五字を書き抜きなさい。

問4 線3の事実から、筆者はどのような心配をしましたか。それが最もよく示された一文を探し、その最初と最後の三字を書き抜きなさい。

問5 文中の「**1**」の「生ハム」は、各地域の何を示していますか。文中より最もふさわしい一語を探し、書き抜きなさい。

問6 線Aのことばの意味は何ですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

A 驚くべきものである。 I 記憶に残るものである。

ウ 表現しきれないものである。 E 経験したことのないものである。

問7 **B** にふさわしいことばを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 不可欠 I 不可能 ウ 不可避 E 不可逆

問8 線4「文化の破壊」とありますが、その時、どのようなことが起こっていると筆者は言っていますか。文中より最もふさわしいことばを探し、書き抜きなさい。

問9 本文の内容として、ふさわしいもの二つを次のア・キの中から選び、記号で答えなさい。

A 日本のグルメブームは本場の味を知らない子供向けの低俗なものである。

I アメリカで生まれた「コンビニ」は今や、日本が最も発達した状況にある。

ウ 「コンビニ」は二十四時間営業、年中無休で現代社会になくはならないものとなった。

E 欧米の大型スーパーは、安くて質の良い商品を求める人々で朝から毎日にぎわっている。

オ 国際社会で、その一員としての独自性を発揮するには、「コンビニ」は邪魔な存在である。

カ 過去に築かれた本当に豊かなものを守り続けてこそ、国際社会での存在感を示すことができる。

キ 国際社会に進出するためには、「コンビニ」も独自の商品開発など個別化をはからなくてはいけない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「孤児院」(児童養護施設)で暮らす高校一年生の「ぼく」と小学四年生の弟は、三年半ぶりに故郷の祖母の家に着いた。「ぼく」は故郷の匂いに懐かしさを感じるが、町を出たときまだ幼かった弟は、その匂いを全く覚えていないと言った。

「さあ、夕餉の支度が出来るまで縁側でも涼んでいなさい」

祖母に背中を軽く叩かれて、ぼくと弟は縁側へ出た。

縁側に腰を下し、足をぶらぶらさせながらぼくと弟はいろんな音を聞いていた。表を通り過ぎて行く馬の蹄の音、その馬の曳く荷車の鉄輪が小石をきしきしと碎く音、道の向うの川で啼く河鹿の声、軒に揺れる風鈴の可憐な音色、ときおり通り抜けて行く夕風にさやさやと鳴る松の枝、台所で祖母の使う包丁の音、それから、赤松の幹にしがみついているの悲しく啼くカナカナ。弟は庭下駄を突っかけて赤松の方へそっと近づいて行く。彼は昆虫を捕えるのが好きなのだ。

(……いまごろ孤児院ではなにをしているだろう)

ぼくは縁側の板の間の上に寝そべって肘枕をついた。

(……六時。お聖堂で夕べの祈りをしているころだな。お祈りは六時二十五分まで、六時半から六時四十五分までが夕食。七時から一時間はハーモニカ・バンドの練習。八時から四十五分間は公教要理。八時四十五分から十五分間は就寝のお祈り……)

孤児院の日課を暗誦しているうちに、ぼくはだんだん落ち着かなくなっていく。しみじみとして優しい田舎のさまざまな音に囲まれているのだからのんびりできそうなものの、かえっていらいらしくなるのだった。生れたときから檻の中で育ったライオンかなにかがいきなり外に放たれてかえってうるたえるように、ぼくも、時間の檻の中から急に外へ連れ出され戸惑っていたのだ。

立ってみたり坐ってみたり、表へ出たり裏へまわったりしながら、夕餉の出来あがるのを待った。

店の網戸を引く音がして、それと同時に蚊やりの匂いが家中に漂いだした。

「さあ、台所のお膳の前に坐って」

「叔父さんを待たなくてもいいよ」

祖母が茶碗に御飯をよそいだした。

「叔父さんは後でたべるっていつているから」

「どうかしたの？」

「どうもしないよ。店をいっいち閉めたりするのが面倒なんだろうねえ。それにいまはあんまりたべたくないそうだよ」

「おや、変な茶碗の持ち方だこと」

しばらく弟の手許を見ていた祖母が言った。弟は茶碗を左手の親指、人さし指、中指の三本で摘むように持っていた。もっと詳しくいうと、親指の先と中指の先で茶碗を挟み、人さし指の先を茶碗の内側に引っかけて、内と外から茶碗を支えているわけである。

「孤児院流なんだ」

忙しく口を動かしている弟に代ってぼくが説明した。

「孤児院では御飯茶碗もお汁茶碗も、それからお菜を盛る皿も、とにかく食器はみんな金物なんだ。だから熱い御飯や

お汁を盛ると、食器も熱くなって持てなくなる。でも、弟のようにすればなんとか持てる。つまり生活の智慧……」

「どうして食器は金物なの？」

「瀬戸物はこわれるからだよ」

祖母はしばらく箸を宙に止めたまま、なにか考えていた。それから溜息をひとつついて、

「孤児院の先生方も、苦勞さまだけど、子どもたちも大変だねえ」

と漬物の小茄子を噛んだ。

「……ごちそうさま」

弟がお櫃を横目で睨みながら小声で箸を置いた。

「もうおしまい？ お腹がいっぱいになったの」

弟は黙ったままである。ぼくは時間の籠が外れたので面喰ったが、弟は孤児院の籠を外せないで困っているようだった。ぼくは弟に手本を示すつもりで大声で、おかわりと言ひ、茶碗を祖母に差し出した。弟は一度置いた箸をまた取って、小声で、ぼくもと言った。食事の後に西瓜が出た。そのときも弟は孤児院流を使った。どの一切れが最も容積のある一切れか、一瞬のうちに見くらべ判断しそれを手で掴むのがあそこでの流儀なのだ。

弟の素速い手の動きを見ていた祖母が悲しそうな声で言った。

「はっちゃやのところは薬屋さんなんだよ。腹痛の薬は山ほどある。だからお腹の痛くなるほど食べてごらん」

弟はその通りにした。そしてお腹が痛くなって仏間の隣の座敷に横になった。祖母は弟に蚊帳をかぶせ、吊手を四隅の鉤に掛けていった。ぼくは蚊帳をひろげるのを手伝った。蚊帳の、ナフタリンと線香と蚊やりの混ったような匂いを嗅いだとき、ぼくは不意に、ああ、これは孤児院にない匂いだ、これが家庭の匂いだったのだな、と思った。思ったときから、夕方以来の妙にいらついていた気分が消え失せて、どこか知らないがおさまるべきところへ気持が無事におさまったという感じがした。

前の川の河鹿の啼き声がふつと断切れた。夜突きに出ている子どもがいるらしい。ヤスで眠っている魚を突いて獲るのだ。河鹿と申し合せでもしたように、すぐ後を引き継いでドンドンコードンと太鼓の音が聞えてきた。途中のどこかで風の渡るところがあるのか、太鼓の音はときどき震えたり弱くなったりしていた。

「もうすぐお祭だね」

ぼくは太鼓の聞えてくる方を指さした。

「あれは獅子舞いの太鼓だな」

「そう、あと七日でお祭」

「ぼくたち、祭まで居ていい？」

ほんの僅かの間だが祖母は返事をためらっていた。

「駄目かな、やっぱり」

「ごうよ」

返事をためらったことを恥じているような強い口調だった。

「おまえたちはわたしの長男の子どもたちだもの、本当ならおまえがこの家を継ぐべきなのだよ。大威張りでいていいよ」

この祖母の言葉で勇気がついて、当分言わないでおこうと思っていたあのことを口に出す決心が出た。

「はっちゃ、お願いがあります」

急にぼくが正坐したので祖母が愕いた眼をした。

「母が立ち直ってぼくと弟を引き取ることが出来るようになるまで、ぼくたちをここへ置いてください」

「……でも高校はどうするの？」

「この町の農業高校でいいんだ。店の手伝いでもなんでもするから」

祖母はぼくと弟をかわるがわる眺め、やがて膝に腕を乗せて前屈みになった。

「孤児院はいやなのかね、やはり」

「あそこに居るしかないと思えばちつともいやなところじゃないよ。先生もよくしてくれるし、学校へも行けるし、友だちもいるしね」

「そりやそうだねえ。文句を言ったら罰が当るものねえ」

「で、でも、他に行くあてが少しでもあつたら一秒でも我慢できるようなところでもないんだ。ばつちや、考えといってください。お願いします」

店で戸締りをする音がしはじめた。祖母は腰を上げた。

「叔父さんの食事の支度をしなくっちゃ。今のおまえの話はよく考えておくよ」

祖母が出て行つた後、ぼくはしばらく机の前に、ぼんやり坐っていた。この話をいつ切り出そうかとじつはぼくは迷っていたのに、それが思いがけなくすらすらと口から出たので自分でも驚いてしまったのだ。気が軽くなって、ひとりで笑い出したくなった。ぼくはその場に仰向けに寝転んで、ひよつとしたらぼくと弟が長い間寝起きすることになるかもしれない部屋をぐるりと眺め廻した。そして何日ぐらいで、弟の孤児院流の茶碗の持ち方が直るだろうか考えた。弟は蚊帳の中で規則正しい寝息を立てている……。ぼくは蚊帳の中に這って行って、³出来るだけ大きく手足を伸ばして、あくびをした。

縁側から小さな光がひとつ入ってきて、蚊帳の上に停つた。それは蛍だった。

行手示す 明けの星 / 船路示す 愛の星 / 空の彼方で 我等守る……

孤児院で習った聖歌を呟いているうちに、光が暗くなって行き、ぼくは眠ってしまった。

どれくらい経つてからかわからないが、叔父の声で目を覚めた。蛍がまだ蚊帳の上で光っていたから、どっちにしてもそう長い間ではなかったことはたしかだった。

「……いいかい、母さん、おれは母さんが、親父が借金を残して死んだから学資が送れない、と言うから学校を中途で止してここへ戻ってきたんだ……」

叔父の声は震えていた。

「店を継いでくれないと食へては行かれないと母さんが頼むから菓種業の試験を受けて店も継いだ。借金をどうにかしておくれと母さんが泣きつくから必死で働いている。これだけ言うことをきけば充分じゃないか。これ以上おれにどうしろというんだよ」

「大きな声を出さないでくれ。あの子たちに聞えるよ」

「とにかく母さんの頼みはもう願ひさげだよ」

叔父の声がすこし低まった。

「今年の暮は裏の畑を手離さなくちゃ年が越せそうもないっていうのに、どうしてあの二人を引き取る余裕なんかあるんだ」

「子ども二人の食料扶持ぐらいどうにかなると思うんだけどねえ」

「そんなことを言うんなら母さんが店をやるんだな。菓九層倍なんていうけど、この商売、どれだけ儲けがうすいか母さんだって知ってるはずだよ。とくにこんな田舎じゃ売れるのはマーキユロンか正露丸だ。母さんと二人で喰って行くのがかつつかつたぜ」

「でもあの子たちはおまえの甥だろうが……」

箱膳のひっくり返る音がした。

「そんなにいうんなら、なにかかも叩き売って借金を払い、余った金で母さんが養老院にでも入って、そこへあの二人を引き取ればいいんだ。おれはおれでひとりで勉強をやり直す」

叔父の廊下を蹴る音が近づき、座敷の前を通ってその足音は店の二階へ消えた。

いまの話を弟が聞いていなければいいな、と思いながら、弟の様子を窺うと、彼は大きく目を見開いて天井を睨んでいた。

「……ぼくたちは孤児院に慣れてるけど、ぼっちゃは養老院は初めてだよね」

弟はぼそぼそと口を動かした。

「そんなら慣れてる方が孤児院に戻ったほうがいいよ」

「そうだな」

とぼくも答えた。

「他に行くあてがないとわかれれば、あそこはいいところなんだ」

4 蚊帳に貼りついていていた蜚はいつの間にか見えなくなっていた。つい今し方の叔父の荒い足音に驚いて逃げだしたのだらうとぼくは思った。

ぼくはそれから朝方まで天井を眺めて過した。これからは祖母が一番辛いだろう。「じつはそろそろ帰ってもらわなくちゃ……」といういやな言葉をいつ口に出したらいいかとそればかり考えていなくてはならないからだ。店の大時計が五時を打つのを、おに起き上って、僕は祖母あてに書き置きを記した。ごく簡単な文面だった。

書き置きを机の上のせてから、僕は弟を揺り起こした。

(井上ひさし「明くる朝の蟬」より)

(注記) 作問の都合上、本文を一部省略しました。

問1 — 線1「時間の檻の中から急に外へ連れ出され戸惑っていた」とありますが、どういうことですか。解答欄に合うように十五字以上二十字以内で答えなさい。

問2 — 線2「箸を置いた」とありますが、弟がそうしたのはなぜですか。解答欄に合うように十五字以上二十字以内で答えなさい。

問3 — 線3「出来るだけ大きく手足を伸ばして、あくびをした」とありますが、この時の「ぼく」の行動の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 弟と異なる動作を行い、自らの心身を解放しようとしている。

I 祖母の家の習慣を少しでも早く身に付けておこうと思っている。

ウ 気持ちが軽くなったため、安心して祖母の家の雰囲気（きふい）にひたっている。

E 弟を見ると孤児院を思い嫌（きら）な気持ちになるので、それを打ち消そうとしている。

問4 — 線A・Bのことばの意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア 学資 I 生活費 ウ 宿泊代 E 給食代

B ア 機会 I 口実 ウ 限度 E 合図

問5 — 線4「蚊帳に貼りついていていた蜚はいつの間にか見えなくなっていた」とありますが、どういうことをたとえていますか。解答欄に合うように二十字以上二十五字以内で答えなさい。

問6 弟についての説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 故郷の人の目をいつも気にし、仲の良い兄の言動のまねばかりしている。

I 祖母に気兼ねしている兄とは異なり、いつも通りのやり方を押し通している。

ウ 幼いながらも思いやりにあふれ、周囲に気を配りつつ自身の意見を言える利発さがある。

E 孤児院の生活になじんでおり、兄ほど故郷の祖母のもとで暮らすことに関心を持っていない。

「以下余白」

一
問
1

a

b

c

切
り

小
計

問
2

問
3

問
4

問
5

問
6

問
7

問
8

問
9

二
問
1

問
2

問
3

問
4

A

B

問
5

問
6

を与えられて、どうしていいか
分からなかったということ。

から。

ということ。

小
計

合
計

受験番号

--	--	--	--	--

氏 名

受験番号は算用数字で横書きにすること